

攻めたり無表情な男の娘と旅館でTSわからせエッチ



攻めたがり無表情な男の娘と旅館でTSわからせエッチ



002

キャラ紹介

川嶋 蓮 かわしま
れん

男の娘である上坂紀乃が恋人の焦らし大好きな高校三年生の男。紀乃の事は最初は女だと思って近づいたが、告白したときに男だと知りそのまま付き合うことになったが今では男の娘の彼が大好きだ。

上坂 紀乃 うえさか
きの

無口ではないが、表情に感情が乗らない無表情な高校三年生の男の娘。学校にはスカートで通っているため、女だと間違われることも多々ある。蓮に告白されて試しにという感じで始めた交際だったが、今では本気の恋愛になっている。蓮には焦らされてばかりで、紀乃が主導権を握ったエッチがしたくて攻めを繰り返すが毎度仕返しをされて終わってしまう。

目次

炬燵の中でデートの計画	005
露天風呂ではお静かに	032 (一部試読)
狸草と大浴場	056
気兼ねない状況で最高級の焦らし	084
あとがき	106

露天風呂ではお静かに

旅行当日を迎えた朝。相変わらず冷たい空気は風に流され肌を刺す。

朝も早く、薄暗く空は明かりを取り戻そうとしている中でも街灯は付いたまま

蓮は着替えなどが入った小さなキャリーケースを転がしながら、厚手のコートを身に纏い駅へと歩いていく。

目的の駅が見えてくると、紀乃もベージュのコートを着て白い息を吐き遊んでいた。

「すまん、待たせた」

「大丈夫、蓮が朝弱いのは知ってる。遅刻する予想して時間伝えた」

「全然嬉しくない信頼をありがとう」

紀乃は頷いて右手に持っていた、飲み口にココアが少し溜まっている缶を口に運んで、左手に持っていた未開封のホットココアを蓮に渡した。

「これ、自販機でココア買ったから」

「いいのか、ありがとう」

蓮はホットココアを受け取り、プルタブを開け一口飲む。

甘いココアが喉を通していく事が分かるほどに寒く、内側から温まっていく心地よさに浸りながら駅の中へと向かった。

「旅館に直行するんだっけ？」

「うん、電車降りたらバスに乗って直接旅館。旅館も山奥になるから」

紀乃は表情こそ変えてはないが、色々調べて楽しみにしていたんだという事が伝わってくる。

「じゃあ向こうでゆっくり出来るな」

「学校とは全然違う景色だろうから、楽しみ」

「そうだな」

蓮と紀乃は話さない時間を苦としない辺り、雰囲気も良く相性もいい。

恋人同士の天敵は観覧車や並んでいる待ち時間というが、彼らにそれは通用しないだろう。

ウキウキと胸を高鳴らせていると電車が着て、空いている座席に座り目的地の駅まで蓮は紀乃にもたれ掛かりながら眠り、紀乃は窓から外の景色を眺めていた。

目的地に着くと、紀乃に肩をトントンと叩かれ蓮は目を覚まし電車を降りてそのままバスの待機所に向かい、バスに乗り込む。

バスに揺られながら数時間、山に差し掛かり左右にウネウネと蛇のよううねる道を登る旅に、二人は肩をぶつけながら身体を揺らしていた。

「……酔った……」

蓮はバスを降りてすぐに木陰の方へ向かい、木にもたれ掛かっていた。

紀乃が蓮の分の荷物を持ちながら、彼に近づく。

「酔い止め、飲まなかったの？」

「……忘れてた」

「運転手さんが、反対側は海と街を見下ろせるから風に当たると落ち着くかもしれないって言った」

フラフラとした足取りで、蓮は紀乃の腕を借りながら移動中、バスの運転手ともすれ違い、会釈をすると運転手さんは二人の仲睦まじい関係と、乗り物酔いの心配交じりの笑みを溢していた。

反対側には木の柵があり、蓮が手を掛け寄りかかると冷たい潮風が勢いよく吹いて全身の体温を一気に下げてられる変わりに、酔いは落ち着いて目が覚める。

俯いていた顔をあげるとそこには、左一面には広い海が広がり、白く大きな橋が掛けられて、右一面には山と市街地が広がっていた。

太陽もすっかり登って海をキラキラと輝かせ、眩しい日差しが心地よく身体を照らす。

「酔い、落ち着いた？」

「ああ、大丈夫そうだ」

気持ち悪さが落ち着いてからも景色を眺めて、彼らは此処の旅館からしか見られない自然といつもの風景がバランスよく混ざり、遠くの山は少し白く染まっているようにも見える。

雪でも積もっているのだろうか。そしてこの旅館でも雪が見れるのだろうか。そんな楽しみを抱えながら、大きく息を吸って深い呼吸で自然の空気を堪能して受付の方へと向かっていった。

待ち受けて、上坂。と名前を伝えると和室の部屋に案内され奥には大きな窓から自然を一望出来、左のドアには露天風呂が付いているらしい。

「客室に露天風呂って、凄いな」

「くじ当てた時の店員さんが必死で僕に伝えてたよ」

「それでも表情を変えない紀乃か……。店員さんにお疲れ様だな」

蓮はローラー部分が畳に付かないようにキャリーケースを置いて、奥にある外を一望できる所の椅子に深く座り込んだ。

「凄いな、ここは……。外は空気も吸えるけど寒かったから冬はここでいいかもな」

「そうだね。お茶あるみたいだけど、いる？」

机の上に置いてあった茶葉と急須、テレビの近くにある電気ポットで好きにお茶を飲めるらしく、紀乃は二杯分のお茶を入れ蓮の対面に座り、間にあるテーブルにお茶を置いた。

「今日は誘ってくれてありがとうな」

「うん、蓮も来てくれてありがとう……。お茶飲んだら露天風呂一緒に入る。せっかくの和室で二人共コートって言うのもさ」

「確かにそうだな」

蓮と紀乃はゆっくりとお茶をすすりながら、和と自然を感じていた。

蓮は早く飲み終わるり、入口付近にある長細いドアを空けると三つのサイズの和

服一色が仕舞われていて、手に取り早速露天風呂の方へと向かった。

紀乃はまだゆっくりとお茶を飲んでいて、蓮を見送る。

露天風呂に出ると、流石に寒いが檜の香りが広がっていて、普段とは違うお風呂にテンションが上がる。

一度シャワーで全身を流し、掛け湯で温度に慣れてから、ゆっくりと浸かっている。

前面だけが吹き抜けになっており、直接冬の風を浴びながら茶色に染まった中にちよこちよこと緑が残っている冬の山を眺め、肩まで浸かり身体を温める。

蓮がゆっくりしていると、紀乃もお茶を飲み切ったらしく、前面をタオルで隠しながら外に出てきた。

紀乃はシャワーを軽く浴びてから、蓮の隣に並んで肩までゆっくりと浸かっている。

蓮は少し筋肉が浮き出っていて男らしさも、綺麗なフォルムをしている。

紀乃も、筋肉は無いがすらっとした体つきでくびれもあり、全身の毛も元々薄くサラサラすべすべの肌だ。

「景色見ながら温泉浸かるのも良いね。露天というのがまた風情あって」

「寒いけどな、でも悪くない」

「この寒さも込みで、僕は好きだよ」

紀乃の小さな口は少し笑っているように見えた。

嬉しそうな顔を見て、蓮もまたお風呂と紀乃で満足感に浸り疲れを癒していった。

二人きりの空間で、裸同士で攻めたがりの紀乃が何もしないわけもなく、早速蓮の右太腿に手を掛ける。

「良いのか？ 紀乃。苦勞するのはお前の方だぞ」

「此処のチケツト当てたの僕」

「だ……だからなんだ」

「この温泉入れているのは、僕のおかげ」

紀乃は自身のおかげでこの旅行に來たことを恩着せがましく伝え、反撃することに罪悪感を覚えさせるような戦略を使うが、この場合相手が悪い。

この一つの恩が有効なら紀乃もまた苦勞せずに攻めを体感できていた事だろう。

しかし蓮は仕返しをしようとはせず、太腿に掛けられた手を振り払う事も、仕返しとして紀乃に触れることも無く、されることを受け入れていた。

紀乃も、やっと気持ちをくみ取ってくれたのだと嬉しく思い、温かい温泉の中で太腿を指先で滑らせる。

温泉のおかげで、肌はすべすべになって水中という事もあり指が滑らかに、そして優しく肌を撫でる感覚は鮮明に伝わっていた。

人差し指から小指までの四本を閉じては広げてを繰り返しながら内太腿を円を描くように撫でまわし、そのまま陰毛と指を絡ませながら上の方へいき、ヘソを通り鎖骨の方へと向かい、首に手を回し頭を手で支え親指をこめかみ付近で止める。

顔を向かい合わせるようにして、お風呂で筋肉が解れ柔らかくなった身体を密着させながら唇を重ね合った。

紀乃の小さくぷっくりとした柔らかかな唇は蓮の幸福感を高め、蓮もまた細い唇で優しさを直接感じられる温かいキスで応える。

ただ一つのキスで、蓮よりも紀乃の方がペニスを勃起させており、亀頭の半分だけ顔を見せていた。

温泉の暖かさも敏感な亀頭には熱くピリピリとした感覚で紀乃を襲っているが、構わずに唇を重ね合わせていた。

綺麗に澄んだ冬の風の音、穏やかな温泉の循環する水の音、その中に紛れる唇が

重なり合う粘り気のある液体が弾け絡み合う音と、息継ぎのたびに出来る甘い吐息で気持ちは高ぶり続けていく。

壁で仕切られているとはいえ、自然の音が丸聞こえの露天風呂。誰にも見られない可能性が高いにしても野外で裸になり身体を密着させ、ただやらしくねっとりキスを交わす背徳感がお互いに性的感性を刺激されている。

紀乃はクールに表情を変えることなく、口の中で舌をクルクルと絡ませ合いあげを蓮に舐められた時にガクツと一瞬だけ首が落ちそうになった。

我慢できなくなっていく紀乃は、立ち位置を蓮の隣から目の前に移動して、右ひざを股の間に忍ばせて睾丸を膝で持ち上げながら、左手を脇腹に重ねて滑らかに撫でます。

蓮は脇腹を刺激されゾクゾクと柔らかな快感が全身を回り、ゆっくりとペニスがか膨らんでいた。

紀乃もそれに気付き、膝をゆっくりと動かし会陰えいんをグリグリと抑えながら睾丸を温泉の中で揺らす。

最後に蓮の舌の裏を舐めながら湿っぽい呼吸を吐き、蓮の左耳へと口を近づける。耳のフチを二人の混ざり合った粘り気を持つ唾液が、口の中で糸を引きながら舌

の先端で舐めると、蓮は首をフツと避けるが顔を抑えている右手で逃げないように捕まえる。

「蓮は耳に弱い。避けるの禁止、ダメ」

「……」

蓮は無言のまま、紀乃に耳を好きなように舐められ目瞑り小刻みに肩を震わせていた。

「耳で感じる変態」

「紀乃もだろ……」

「あは、確かに……はーん……あん……ちゅ……」

蓮の中で耳を舐められるほどに、仕返しの闘志を燃やしながらペニスを硬く勃起させていた。

耳たぶを柔らかい唇で優しく何度も啣えたり離したりを繰り返す。

頭を押さえていた右手が鎖骨をなぞり、乳首に優しく触れる。

蓮の背筋にビリビリとした快感が広がり腰を引いた。

紀乃とエッチを繰り返して行く中で、何度も乳首を触られたり舐められたりするように、始めはさほど感じる事の無かった乳首もちゃんと快感を得られるように

開発されていた。

男同士のエッチで、優しく攻められる部分はお互いに攻め合う事も多い。

それでも快感を感じやすく、早漏の紀乃は蓮を攻めきることが難しかった。

そんなことも今日で終わりだと、紀乃は張り切ってじっくりとキスや耳舐めて攻めていく。

耳に息をふーっと吹きかけ、顔をもっと近づけ耳の裏、付け根の部分を舌先で下から上へと舐め上げる。

紀乃は攻めているだけでも精神的快感を得て、ペニスだけに留まらず乳首までピンっと勃起させていた。

耳元で、チュ……クチュ。とリップ音を響かされてペニスは反り返り色欲に拍車^が掛かり、ついには蓮も動き始めた。

右手で紀乃のお尻を触ると、さらさらとして程よくぷにぷにと弾力もある綺麗なお尻で、その瞬間紀乃は耳舐めを止めて蓮の顔を鼻がぶつかりそうなほど近くで見つめる。

「旅館チケットを当てて、誘ってくれたお礼。気にせず続けていいよ」

「今日は、僕がッ……」

上からお尻の割れ目をなぞり、アナルに指が差し掛かるとキュっと力を入れて言葉を抑えながらクルクルと撫でていた指を下半身の方へと伸ばしていく。

反抗されても顔には出なかつたが分かりやすく動きには出て不満そうに、そして焦るようにペニスを指先で掴み、水面を揺らしながら上下にゆっくりと動かす。

蓮もまた、アナルを指でトン、トンとゆっくりと突いて、左手で乳首を攻められた仕返しをするように、あくまで乳首には触れないように胸を手のひらで包み手を萎めながら五本の指を乳首に使っけ乳輪に触れそうになつたら手を離す。

すでに勃起をして期待している乳首には触れないように焦らし、紀乃から精神的余裕を奪っていく。

紀乃は蓮のペニスを焦りながらも、じつくりと指先の弱い力で極力焦らせるように頑張りながら扱き、蓮は余裕の表情でアナルを突き弱くも頭に響く快感を加えながら今一番欲しそうな乳首への刺激を触らないように焦らしていく。

紀乃の、表情を変えないまま必死になっている姿に、蓮はますます欲情するばかりだ。

「おちんちん、ビクって跳ねてる」

「紀乃も乳首勃ちすぎ、そんな顔しといて淫乱過ぎだろ」

「蓮とのエッチが好きなだけ。でも今日は僕が攻める番」

「もう目を細めといて何言ってるんだ」

「うるさいな……」

言葉でお互いに気持ちを高ぶらせ合いながら、自身のペースに引き寄せ合う。

紀乃自身、これ以上は蓮のペースに引つ張られると思ひ、唇を重ねて黙らせる。

柔らかくぷっくりとしていた唇も先ほどよりも熱を帯び、じめっとした息が交じり合う。

彼らはその一つのキスで、興奮を維持させ触らずに焦らし、弱い刺激で大きな刺激に期待させ、身体の感度もどんと上げていく。

紀乃は座り方を変えて、蓮の太腿に乗るように足を広げて両手でふわっと包むようにペニスを握り、上下に扱き始めた。

指の膨らみの段差がカリをコツコツと当たり、ふわっと握り隙間も作っているおかげで水流で揺られ、不定期な刺激になって慣れないようにされてる。

ただ、紀乃が太腿に座ってくれているおかげで、ぷっくりと小さくもピンっと勃起している乳首が水面から顔を見せた。

紀乃は蓮よりも少し目線が高くなり、攻め手になれているような気がして心の中で満足げな気持ちを持っていたが、その幻想はすぐに崩されていく。

蓮は紀乃の背中に左手を回し身体を近づけさせ、右乳首に舌を伸ばす。

乳輪の周りをザラザラとした感触でなぞり、まだ触れることはせず極限まで期待値を上げる。

紀乃は眉を寄せ始め、小さく身体を震わせ快感への期待値が何倍にも膨れ上がり、頭の中にはもどかしさが広がって蓮のペニスを扱く動きが鈍くなっている。

乳首に息を吹きかけると、小さく電気が走ったかのようにビクビクと身体をうねらせていた。

温泉の気持ち良さもまた快感に思えてくるほどに焦らされている身体は、呼吸も難しくなり紀乃は物悲しそうな目をしている。

紀乃のペニスは快感を求めて皮から亀頭が半分出たままにガチガチに可愛らしく勃起させていた。

蓮のペニスを包む手が緩んだタイミングで、乳輪の周りをなぞっている乳首へ前触れもなく突然吸い付き、唇に挟んだ乳首を舌先でレロレロと素早く左右に払う。

「アツう——いッ……あ……」

身体を逸らしガクガクと暴れようとする身体を、背中に回している左手で抑え付けながら、乳首を吸い続ける。

波の立つ音に紛れ、チュパ……とリップ音をわざと立て、吹き抜けの露天風呂だと他の客にまで聞こえるのではないかという緊張感がさらに興奮を駆り立てる。

「外が丸見えのところでもそんな悶えて恥ずかしくないか？」

「ツ……僕は……」

蓮を攻めたかった。蓮を先に射精に導きたかった。それに失敗しそうになっているのに気持ち良さに支配され、露天風呂という野外でやっているような背徳感が新鮮な快感となって身体中を犯していく。

蓮は仕返しが上手くいったという満足感で満ち溢れ、何処まで行けるかが楽しみになっていた。

唇で乳首を挟み直すだけでビクツと身体を跳ねさせる反応を面白がり、パクパクと何度も啜える。

紀乃は手コキを止めるどころか、犬のように呼吸を荒くして浴槽の壁に手をついて快感に耐えているだけだった。

これほどまでに快感に弱い身体で蓮に攻めて勝とうとしていると思うと可愛らし

く、子どもの足搔きの様に感じてますますペニスへと意識が向けられる。

蓮は乳首を舐めまわしながら右の掌で紀乃の亀頭を包むと、お風呂の中だというのに、不自然にヌルヌルと粘り気があった。

「お風呂を汚したら駄目だぞ」

「これは……ち、ちがうから……」

触られているほうもヌルヌルと滑りの良さを感じ、亀頭にビリビリと強い刺激が溜まっていく。

親指で裏筋を抑えながら竿にも手を掛けゆっくりと上下へ動かしていく。

紀乃が身体を反らしうねらせ、蓮から逃げようとバシャバシャと身体を動かしても背中を抑えられている手で、蓮の都合のいい場所へと動かされるだけだった。

「露天風呂で隣にも部屋あるんだから、落ち着かないへ変に思われるぞ」

「……っ——」

蓮の言葉に紀乃は抵抗するのを止めて身体を丸め、射精しないように身体の奥深くに快感を溜め込み射精までの時間を長くする。

ガクガクと身体を震わせる回数も増えていき、紀乃は口にギュツと力を入れトロんと蕩けた目には涙を溜め、蓮の目のまで喘ぎを我慢する表情を見せつけるように

耐えていた。

「紀乃、お風呂の中で出したらダメだぞ。せつかくの温泉を汚したら、駄目だからな」

「ツ——」

言われなくても分かっている事を言われる。紀乃にはただ限界まで耐える事しか出来ない。

舐められる乳首から頭に響くビリビリとした快感で意識は遠のいていき、嬌声が少しずつ漏れ始めていた。

「声は我慢しろ。止めるぞ」

「ツ……あ……はんツ——」

我慢しろと言いつつも、紀乃が弱い攻められ方の乳首の先を触れるか触れないかの距離で素早く弾き、無理やり声を出させる。

そして声を出したら、手コキも乳首舐めも止めて、欲しがる刺激を与えない。

身体中を左右にうねらせ、腰をガクガクと震わせてペニスも勃起させたまま亀頭を腫らし快感を落ち着かせるように呼吸に意識を集中させるが、紀乃は無意識に自身の乳首とペニスへと手を伸ばすが、蓮がそれを許すことは無く両手首を掴み悶え

る身体を抑え込む。

「最初に乳首にも手が伸びるとか変態だな」

「あ……うっ……はあ……はあ……」

息を吐く度に肩を震わせ、ペニスをビクンッと何度も跳ねさせていた。

かなり射精感が近かったのか、蓮の声もあまり届いていないように感じる。

あくまでも、浴衣に着替えるついでに入った露天風呂だったが、ここでのぼせる程入っただけで、夜に大浴場に行く気も下がってしまいそうで、蓮は一度終わらせるのもいいかもしれないと考えた。

「紀乃……」

名前を呼んで顔を合わせ、じめつと色気を纏う唇が痺れる程繰り返すキスを重ねる。

「蓮……あ……ん……」

恥ずかしさとお風呂で火照って頬と耳を赤く染め、表情筋は緩んで柔らかい表情で舌を絡ませ合い、チュパ……チュパ……とリップ音を響かせながら身体を抱き寄せ合う。

温まり切った身体で勃起しているペニスを挟み込み、お互いに腰を擦り合わせて

お腹の柔らかさと腹筋の程よい圧がペニスに加わり、お互いに挿入し合っているよな快感と満足感、そして幸福感が満たされていく。

腰を打ち付けるようにして、お互いにくっつけているお腹の間を搔き分けたり、グリグリと擦り付け、亀頭や竿を左右上下に圧を加えながら刺激を啜えていく。

どちらかが攻めるといってもなく、お互いに圧を加えながらお互いのペニスを刺激しオナニーをする感覚だ。

時折、ペニス同士がぶつかるとお互いの事をより一層意識して、竿同士をぶつけない亀頭同士で擦れ、自身が気持ちよくなりたいたいという欲望と同等の快感がぶつかり合い、二人分の欲望がどちらともペニスに伝わる

「はっ……はっ……あん……蓮……イツ……イキ、そう……」

どんどん激しくなっていく水面の波と比例して、息遣いも荒く乱れ野外だという事を分かっているも抑えられない喘ぎ声が漏れて、蓮の擦り付ける強さと勢いがより一層激しくなっていく。

ピチャピチャとうるさいほどの水の音でも呼吸音は鮮明に聞こえ、お風呂の中で射精する事に少しの抵抗を感じた紀乃はキュッと動きを止め腰を引くところを、蓮意地悪にも腰を突き上げ亀頭同士がぶつかる。

「だ、ダメッ……まッ——イグッ——うッんあッ——……」

試読はここまでとなります。

この作品、パーツの転載、複製、配布を禁止します。

サークル青。

トウエスイ